

女肩衣

泉鏡花作

一

末法救世の大導師法華經の大行者、當七面山の開
祖妙像寺日秀が、此の寺の為に記し残した未來記の
中に××年××月××日・・・・・播古木子花咲
く」とあり、果せる哉。

味噌を料理すべき役に當てられたのが、女人形立
川綾柳が座中で、君吉といつて一番の年少、臺所を
働くのを、何と間違へたか、餘所行を引張つて、之
がために桃色の手巾を前垂がはりにして紅の襷かけ、
絲のやうな黄金に、眞珠の入つた小さな細い指環を
嬉しさうに小指に嵌めた手に播粉木を構へたが、凡
て駄々を捏ねるといふ身振。一體四谷鹽町鹽煎餅屋
の女だけれども、兩親があつて甘やかして育てたか
ら、ずつと姫様で渡らせられ、炊事の業には馴れな
いので、播鉢が前後左右に廻つて、板の間が、がた
んがツたん。

「おつと、萬歳樂々々、瓢箪鯨を押へましよ。」
と竈の前に立つた姉さん被、中形の浴衣の上へ、黒七子に劍鳩酸五ツ紋の袷羽織、昨夜茶屋場の由良之助を使ふ時、上下がはりに洒落に着るのだ、と言つて、折から樂屋へ來合せた情人筋のを奪つたまゝであるのを、恰もどんよりした今日のお天氣、薄ら寒いのが幸と一着に及んで居る、彙次といふ中年増。

「一寸生捕ります形ぢやあないか、搦鉢と申します者は、お前、そも／＼頼朝こう時分から生きて居るものでございまして、板の間では躍りますものでございませよ。」
「だつてお前さん、仕様がなないんだもの。」と君吉は俯向いて笑ひながら、ごし／＼、搦粉木に念を入れると、益々動く。

「感心！ 搦鉢が棒のさきに附着いて廻るぢやあないか。然う旨くは、為ようたつて出来ないものだ。あゝ見事なこつた、やゝ、やゝ、此の處練磨の手術。」

「厭よ、笑はしちやあ不可ません、何故だらうね、

あれさ。」

「どツこい、其處だ。」

「不可ませんよ、あれ。」

「妙々、そら刎上つた、おつと轉んだり、やあ／

＼廻ります／、とこまかしてよいことな。」

と足拍子を踏むと、搦鉢は愈々躍る。

「知りませんよ。」と拗ねたやうに言つて、君

吉は眞赤になつた。

糸次は急に眞面目な顔で、

「串戯はよして餘り旨いよ。一寸文福茶釜ツてこ

ともあるしお寺ンだからね、其の搦鉢に魂が入つた

んぢやあるまいか。何うも飛び方が一通でない。羽

が生えたのかも知れないよ。氣をお着け、お前さん

に惚れたのかも知れない、ね、そら、がツたり。」

「厭な、姉さん。」と言ふと、丁ど搦鉢に廻され

て君吉は後退りになつた處、吃驚したやうに思はず

搦粉木を放して、兩手で縁を押へると、發奮に二ツ

ばかり揺れて、やう／＼靜まる。

「東西、恚やういたしましたるが、藝當發端にご

ざります。これより太夫あれなる搦粉木を取上げ、
トンと呼吸を入れますれば、搦鉢が自然に動く。先
づは、つかず離れず兼合の手元にお目を留められて
御覧あられませう、あい、来た。「と可い機嫌、持
つてた鐵火箸の長いのを揃へて取直すと、竈の縁を
叩いたり。

「お君さん、打棄つてお置き。男の五ツ紋を引掛けて釜前を勤めるやうな人に取合つてちや、搦鉢に羽が生える位ぢやあ濟みません。狂人に刃物ツてことがあるが、何の事もない桑次に羽織さ。取合つてると怪我をする、恐いよ。」と向うむきになつて俎板を控へ、大阪漬を拵へようと、傍目も觸らず働いて居たのが、鐵火箸で竈の縁を叩いた桑次の口上に動かされて、今取合ふな、といふ口で、自分が取合ずには居られなくなつた、升代といふのが、

「桑次身に染みて働かないか。だから謂はないこつちやない。汝のやうな藝人は眞面目に所帯を持てさうもない。引摺つてばかり居て、方がへしがつきやしまい、とお斷り申したのだ。」と不意に妙なことをいひ出した、然も鼻息の荒い男の聲をするから、桑次は呆氣に取られて、君吉と齊しく板前の姉さんを熟と見た。

「すると汝何と謂つた。朝寐も宵張もこんな家業をしてる内は仕方がありません。之が何も藝妓や娼

妓といふのぢやあなし、情怠風が手足に染込んで、筋が弛んだといふわけぢやあないんですから、明日が日お前さんと一所になつて。」

桑次は君吉と顔を見合せ、默然になつて怪訝な顔。

「よしんば共稼といふので、私が寄席を辭めないにしても、さうなりや所帯持ですもの、炭にも油にも氣を付けますよ。朝もしら／＼あけから整然と起きて、水を汲んで、釜の下を燃しつけて、米を磨いで、火鉢の掃除をして、鐵瓶を洗つて、水をさして、其をかけて、さあ、其内にご飯がむれると、お香の物を出します。皿小鉢は、晩く歸つたけれども昨夜の内にちやんと洗つてあるといふもんだから、ほらね、ぐいと一ツ拭巾をかけさへすりや可い、直ぐお膳立が出来ると、それから起すんよ、貴郎、一寸、お前さん。」

「おや、升さんが何うかしたよ。」と果しがないから君吉は又搗粉木に取懸る。桑次はらりと、鐵火箸を提げて横に向いて、

「今に泣出すんだらう。」とうつちやつたやうに

いふ。

升さんは委細構はず、

「最う九時ですよ、お前さんと屹といふよ。私が、あゝ、何うしてお前さんの方が餘程情けさうだツて謂やあがつたぢやあないか、」と面に色を染むるまで流暢に且つ早口に息も吐かないで、桑次と其の所謂情人筋なる五ツ紋の羽織の主某と、男女の聲を入交ぜに饞舌つたが、一寸句切ると、したゝかに氣をかへて大聲に、鋭く、突込んで、

「やい、桑！」

「何だね、」と桑次は吃驚する。君吉も思はず手を留める。と升さん愈々眞面目で、

「其に何だ、最う彼はお晝といふのに、澁々起出しやあがつて、井戸端へでも出ることか、漸ツと釜の下を受持つたは可いが、其の形で、ぬうとして、折角働いてる者をつかまへて、突拍子もない搦鉢の口上なんか吐し居る、是見な。消えさうになつてるぢやあないか。」

とかさにかゝつて疊みかけた升さんが、急にがらりと變り、莞爾して背後向に手を伸ばす、と君吉の背中を丁。

「トまづ遊んだものさ、彘次め、理に落ちた顔を
して居る。」

「升さん、何、今のは。」

「五ツ紋の言種だよ、お前さんへ、助太刀さ。」
君吉も笑ひ傾き、

「御苦勞様でございました。」と二人ともけろり
とする。

「こん畜生。」と彘次は躍起となつて火箸をばつ
たり。

「おつと飛道具。」と升さんは飛上つた、ばた
／＼といふ中へ、本堂の方から静な跫音。

妙像寺の厨の口へ、先づ半面を出だして勝手の様子
 を窺つたのは、喜多八といふ剽軽な藝名と、其の
 麗な容貌を以て、立川の一座に呼物の若太夫。

名は其の體を表す、此の婦人は至つて内端で優し
 い、顔立も打上つて品の可い方、氣質も實味で串戯
 口一つ肯かないのであるが、おどけ方の人形に不
 議の妙を得て、赤坂竝木の北八の如きは、向うへ廻
 つて彌次で出て居る綾柳さへ、舞臺で思はず微笑む
 といふ位。

近頃飯倉邊の寄席へ、一座が懸ることになつたが、
 樂屋の連中は京橋築地あたりに住居があるので、通
 ふのに足場が悪いからと、都合上此の妙像寺の奥を
 借りて、女同士煮炊の業も面白半分、わつといふ中
 に喜多八は一人愼深く窮屈さも構はず師匠の傍に添
 附つて居廻の世話をする。寺の小僧の十八ばかりに
 なる色の白いのが法華經を誦むのを難有がつて日の
 中普門品を習ひたいといつたと謂ふので、若有女人
 設欲求男、喜多八さんは小僧に氣があると、殊の外

評判が善くないのである。

渠は恚る境涯の仲間にも、内端に淑しやかな物越
で、

「柔次さん、皆さん御苦勞様でございます。」

「おや、一寸お前さん、まあ此處へ来て御覽なさいよ、大騒ぎだから。」 と柔次は漸く靜つた。

「大抵ぢやあないのね、澄みません。」

「何う仕りました。」 と威勢よく答へて澄して居る。

「あの少しばかり憚り様ですが。」

「ばあ、お小僧さん、何の御法要でございますか。」

「と差出でる升代が、又た厭がるのを知つて人の悪い。」

喜多八は苦笑をして、

「何うぞ、其だけはいはないで下さいまし、私は最う。」

「ぱツとして浮名が立つてお悪いなら、畏りまし

た。」「 糸公くめこうが皮肉ひにくなり。

喜多八きたたは聞かぬ振ぶり、恚いかる二人にんに取合とりあつては叶かなはじ

と、

「君きいちやん御願おねがひですよ。」

搦鉢すりばち係がの可愛かほいのが、

「何なんでございます。」と莞爾にこ々々／＼、笑わらひながらも、
さすがに之これは頼母たのもしい。

「あのね、お師匠ししやうさんがね、」

「は、」

「一寸何ちよつとなになんですよ、あのう、大變たいへんにお腹なかが空すい
たんですつて、それですから、あのね。」といひ淀よど
む。お師匠ししやうさんのことゝあるので、増ますも糸くめも茶ちやには
出で来きず、眞顔まがほになつて御上使おじやうしの面おもてを瞻みまもつたので、喜き
多八たは何なにか打出うちだし悪にくさう、我わが事ことでゝもあるやうに
颯さつと顔かほを赧あからめながら、

「お膳立げんたての出で来きますのが待遠まちとほいつてんぢやあゝり
ませんけれども、何どうぞね、おむすびを拵こさへて下くださ
いましたつて。」

「さあ、大變たいへん。」

「御覽、だから謂はないこつちやあない。くだらないことを言つて、働くのに身が入らないもんだから、仕様がなないね。」と急に眞面目になつて板前は太く氣を揉む。

柔次は顔を顰めながら、釜の前に蹲んで慌しく、「おうい、井戸端のウ。」と小聲で引張つて呼ばはると、前の井戸端で米を磨いで居た小房といふのが、雲を切つて兩手をぶらり、勝手口へ顔を出して、

「何。」

柔次は喜多八を仰いで上目づかひ、米さへ未だしらげ果てざる状を、小房で見せて、ひたと恐縮。

「内證々々、御覽の通の體裁。」

【完】